

“研究を止めない” ために — テクノモール初のオンライン開催での挑戦 —



情報工学科 山中 直明

慶應義塾大学理工学部・理工学研究科のKEIO TECHNO-MALL（慶應科学技術展）は、20年を超える伝統があり、2,000名以上の参加者を集める理工系最大級のエキシビジョンとして確立し、活動を進めてきました。2020年春に世界中に感染が拡大したCOVID-19によって、テクノモールも大きく影響を受けました。「2020年はテクノモールの開催が難しい」と思われる状況の中、中止、延期の議論が行われましたが、多くの教員、学生から「活動を止めるべきではない」「できる範囲で実施すべき」という意見をいただいたため、当初の予定通りの

日程で初のオンライン開催を行いました。テクノモールの一つの側面であるプレゼンテーションは、オンライン講演会、シンポジウムとして実施をしました。シンポジウムは、むしろ従来よりも充実をさせ、秋から5回にわたり広いトピックスを網羅し、“プレテクノモール”として実施しました。プレテクノモールは毎回100名以上の参加者を集め、熱心な質問や議論が交わされました。

2020年のテクノモールは、開催21回目の長い歴史の中で初めて医学部との共催により、フルオンラインで2020年12月18日に開催されました。当日は「慶應義塾の医工連携」、「AIが変える未来」、「テクノロジーが拓くスポーツの未来」、「COVID-19のビッグデータ解析」の4つのテーマでシンポジウムセッションを行い、ゲストをお迎えし、本学

研究者とのディスカッションをライブ配信し、1,918アクセス（1,261人参加）という大変な盛況ぶりでした。各研究室等によるブースは、医学部からの多くの参加を含め79ブースで37,180のアクセス（21,459人）をいただきました。ホームページ上（<http://www.kll.keio.ac.jp/ktml>）で、各研究室等のブースのパワーポイント、動画による説明の閲覧、さらにクリックすると各教員や大学院の学生と直接議論ができる構成としました。一方、反省としては各教員らとの議論は、やはり敷居が高かったのか、なかなかアクセスしていただくことができませんでした。小生の研究室の場合も、数百のコンテンツ閲覧がありましたが、直接の面談は数人しかすることができませんでした。

それらのことをフィードバックし、2021年のテクノモールは、最新のオンラインツールを用いて2021年12月10日（金）に開催されます。このツールは理工学部情報工学科卒の間下直晃氏が代表取締役社長を務める株式会社ブイキューブの作ったサービス“EventIn（イベントイン）”をテクノモール仕様にカスタマイズしたものです。右記の写真は2021年のオンラインによるテクノモールの開催イメージであり、当日はさらに充実したモールとする予定です。5フロアに分かれた100以上のブースを同時進行させ、各ブースはパワーポイント、動画によるデモ、プレゼンテーション、ミーティング、実験の中継が行われます。もちろん、ホットトピックによるシートプレゼンやパネルもダイナミックに行います。本来のテクノモールで行われていたFace to Faceの説明が行われることが期待されています。

この機会に是非、オンラインの気軽さを利用して、母校の研究室のアクティビティをご覧ください。



2021年に実施予定のEventInによるテクノモールのフロアイメージ（全部で5フロアの予定）